

皆様、おはようございます。

ただいまご紹介に預かりました、特定非営利活動法人仙台夜まわりグループの青木です。どうぞよろしく申し上げます。

本日は、黒川地区構成保護教会様主催の、第 75 回「社会を明るくする運動」にお招きいただき、お集まりいただいた皆さんに、私どもの活動についてお話しする機会を頂戴しましたこと、心から感謝いたします。

私ども仙台夜まわりグループは、仙台市内を拠点として、25 年間、ホームレス支援、生活困窮者支援の活動をしておりまして、本日は、仙台市内の路上生活者の状況ですとか、私どもの活動についてご紹介させていただくことで、皆様の常日頃のお働きと少しでも繋がっていくことができれば幸い、と願っております。

それではお話しさせていただきたいのですが、まずはじめに、現在、日本全国、そして仙台宮城に、どれくらいのホームレスがいるのかご紹介いたします。

厚生労働省では、毎年 1 月に、ホームレス概数調査という、全国の区市町村のホームレス数の調査をしております。

これは、今から 23 年前、2002 年 8 月に公布されたホームレス自立支援法という時限立法に基づいて、翌 2003 年から毎年おこなっているのですけれども、今年、2025 年の 1 月も、私たち国から委託を受けて仙台市内のホームレス数の調査を実施し他ののですが、その調査結果が、今年 4 月 26 日に公表されました。

それによりますと、今年 2025 年 1 月の時点で(一番上になりますね)、日本全国で 2,591 人のホームレスがいること確認されました。宮城県内は 76 人、そのうち仙台市内は 75 人でした。

今から 23 年前、2003 年に行われた最初の調査では、全国で 25,296 人の ホームレスが確認され、宮城県内は 208 人、そのうち仙台市内では 203 人でした。

ですから、この 23 年間で、2003 年の 25,296 人から今年 2025 年の 2,591人スライドと、約 1/10 に減っています。

特に寄せ場、飯場と呼ばれる地域がある東京、大阪、名古屋、神奈川の減少が顕著でして、減少の理由は、先ほど紹介しました 2000 年 8 月に公布されたホームレス自立支援法に基づく官民による様々な施策の効果が大きいように考えられています。

ただし、ですね、こと仙台市、宮城県に限っていえば、スライド 3) 2003 年に 203 人でしたが、2011 年の東日本大震災後に 100 人前後を推移して、スライド 2) 2022 年が 88 人、2023 年 84 人、2024 年 79 人、そして今年 2025 年は 75 人と、だいたい横ばいが続いておりまして、つまり、日本全国で、この 20 年間の間にホームレス数は 2 万 5 千人台から 2 千 500 人台と、約 1/10、右肩下がりに激減している、にもかかわらず、仙台市内に置いては 20 年前の 203 人から今年の 75 人、と 1/3 弱くらいにしか減っていない。減り方が鈍いんです。

特に 2011 年の東日本大震災後、あるいはコロナ禍の数年間にはむしろ増加しましたし、その後、減ったり増えたりを繰り返して、この数年は横ばい状態。

仙台市内でも、先ほど来申し上げています、官・民それぞれが支援施策を実施して、毎年だいたい 50 人くらいのホームレスがお部屋に入ったり仕事を見つけて路上生活を脱却している、にも関わらず、数がほとんど変わらない、ということは、路上生活を脱却した 50 人と入れ替わるように、新たに毎年 50 人の方々が路上生活に陥ってしまっている、という現状があります。

さらに申し上げますなら、ホームレスの数をカウントするのに、たとえばネットカフェに長期滞在している人、車の中で生活している人たちは数に入れないことになっていきますし、ファストフード店で夜を過ごしながら 次の日の仕事を探す人、だとか、知人の部屋に居候している人などの数も入れられていない。

ところが、イギリスをはじめとする欧米諸国の公式な「ホームレス」の定義では、日本のように路上で寝泊まりしているという限定的されたことにとどまらず、あらゆる意味で不安定居住を強いられている人たちも「ホームレス」状態である、と定義づけられておりまして、そのような意味で、先ほど仙台市内に直近で 76 人の ホームレスがいると申しましたが、車上生活者、ネットカフェ長期滞在者、ファストフード店で夜を明かす方など、数字に反映されないような、境界線上でギリギリのところまで途方に暮れている人たちがたくさんおられまして、それらを含めると、ホームレス状態の人たち、仙台には、79 人の 1.5 倍から 2 倍、すなわち 120 名～150 人くらい、あるいはそれ以上の人たちが、今この時も、仙台、宮城で、今日、明日どうなるかわからないという不安な毎日を過ごしている、まさに「ホームレス状態にある」ということになります。

そのような仙台の状況の中、私たち仙台夜まわりグループは約 25 年間、支援活動を続けてきましたのですが、ここで、私たち NPO 法人の沿革をご紹介させていただきたいと思います。

私たち仙台夜まわりグループは、2000 年 1 月 13 日に活動を始めました。今から約 25 年前ですが、その頃仙台は、今に比べて格段に寒かったような覚えがあります。12 月から 3 月の間に何度も大雪が降り、その度に雪かきに苦勞をしたことを思い出します。

そのような仙台市内で、当時少なくとも 200 人以上、路上生活を余儀なくされていた方々がいました。榴岡公園内にテントを張ったりブルーシートで小屋掛けをして寝泊まりをしていた方々、西公園内とその周辺、さらに仙台駅やその周辺、地下通路、その他、勾当台公園ですとか、橋の欄干や橋の下とか、市内にある各公園の東屋などに、ですね。

そのような中、毎年冬の時期に、10 名以上の方々が路上で亡くなっていました。その死因の多くは、凍死であったり、栄養失調による衰弱死、いわゆる餓死であったりしました。

少なくとも私たちが住む仙台、宮城で、遠い世界の話でなく、私達の足元で、誰にもみとられず、毎年路上で亡くなられている、なんとかそういう悲しい出来事起こらないようにしたい、という思いで、私と妻、そして同僚の、あわせて 3 人で、週に一回夜回りを始めました。

2000 年 1 月 13 日のことでした。

最初は、使い切りカイロをもって、仙台市内中を巡回して声かけ続けました。体の具体はどうですか？ 何か困っていることはありませんか？

それから毎週一回、木曜日の夜 8 時くらいにスタートして、居場所を探しながら一人一人に声かけしますから、200 人以上の人たちと出会うのには相当な時間がかかりまして、午後 8 時ごろにスタートしてほしい夜中の 3 時くらいまで、仙台市内や郊外を巡回しました。でも、最初は警戒して誰も私たちと話そうとはしてくれませんでした。これ 後からわかることなのですが、彼らは、それまで様々な被害を受けていた。例えば酔っ払いに絡まれたり、蹴られたり、殴られたり、石を投げられたり、ひどい時には小便をかけられたり、そういう酷い目にあっていますから、見知らぬ人に突然声をかけられたら警戒をするのは当たり前です。

「ホームレスは怖い」という根拠のないイメージを持たれがちですが、それでも、怖がっているのはむしろ彼らの方だったんですね。ですから危険を回避するため、身を守るために、なるべく単独行動を避けて、複数でいるようにしますし、まとまって野宿をしようとします。

日中、公共の施設、図書館ですとか、市役所や区役所のロビーなどで過ごし深夜になったらそれぞれの寝床に戻って来て、ほんの束の間の休息を取るというのがルーテンです。

ところが、私たちが活動を始めた 25 年前当時、仙台市の公式見解があるのですけれども、その公式見解はこういうものでした。

「仙台市内にはホームレスは存在しない。よって仙台市ではホームレス支援施策を講じない」ということでした。

それでは、私たちが毎週実際に出会っている仙台市内の 200 人を超えるホームレス、「いない」ことになるのか、と、いたく憤慨した覚えがあります。すなわち、存在しているにも関わらず、存在しないとされる、これは、「ホームレス」という側面が如実に表している、私たち社会の実相だと思わされます。いるのにいないとされていく、社会で、問題を抱え苦しんでいる人たちが存在する、にも関わらず、問題はないこととされていく、これは、このホームレスに限らず、社会には、さまざまな歪みや問題があります。でも、それを認めずに、ないこととされていく、その結果、なんの処置も施されず放置されていく、という私たちの国や社会、私たち自身の現状がある、ということ、を、支援を通しての関わりが深まれば深まるほど、痛感させられてきたのですが、先ほど申しましたように、25 年前、夜まわりを最初に始めて以来、毎週毎週出会って、声をかけていくうちに、だんだん相手が名前を名乗ってくれるようになり、身の上話しをしてくれるようになり、困り事や悩みを相談してくれるようになって関係性が深まりました。そして、彼らの切なる要望に答えるような仕方で、背中を押されるような形で、週一度の「夜まわり」から始まった活動が、広がりました。

お手元の資料では2000年から始まったものと2010年に始まったもので整理してありますが、ざっくり申し上げますと、通常の活動として、夜まわりの他、最終列車が出た後の深夜にホームレスの安否確認、深夜夜まわり、毎月第四土曜日のカレーの炊き出し。毎月第一土曜のセミナー・食事会。この活動は、食事会とリンクさせてセミナーを開催し、働く人の権利の話ですとか、最低賃金、公的扶助の利用の仕方、健康問題などの学習会を催しています。また、当事者が主賓となってゆっくり過ごしてもらおうというコンセプトの大人食堂(毎週木曜日)、シャワーを浴びたり洗濯をする機会を提供したり(毎週月曜日)、就労意欲を失わないようにとのコンセプトで、清掃アルバイト機会提供(毎月第二、第三、第四土曜日)、相談センター「HELPみやぎ」の運営、その他、居宅確保支援、生活見守り支援、リユース事業、アルコールやキギャンブル依存症の方々の回復プログラム実施、さらには、ネットカフェ長期滞在者や車上生活者の方々の調査や支援と、ほぼ毎日当事者と出会うような活動となって、現在に至っています。

ただですね、これら多岐にわたる活動というのは、何か私たちの側から、組織を拡大するために広げて来たではありませんで、出会った当事者たちから、これに困っている、これをしてほしい、という切なる要望があって、なんとかそれに応えたい、そういうところで一つ一つスタートして、結果的にほぼ毎日支援活動をするに至ったという経緯があります。

私たちのモットーは、「できるときに できる人が できることを」。小さな働きでも、想いのある人が、小さくてもできることを持ち寄って、それらを紡ぎ合わせるようにして活動を形作ってきました。

さて、ホームレスの実像に迫ってみたいのですが、ホームレスに至る原因として、ただし、ホームレスといっても最初からホームレスだった人はいないんですね。

それまで地道に働いてきたけれども、リストラで突然仕事を失い、家賃を払えなくなって、ある人はそこからホームレスになっていく、またある人はなんとか仕事を探そうと粘り続けるのですが、今なかなか仕事がないですね、そこでサラ金、町金に手を出して、家賃や生活費に充当する。多重債務を抱え込むようになる。利子すら払えなくなる。そうになると、もう転げ落ちるようにホームレス状態に至ってしまう。その、多くは、家族との関係が切れてしまっている。支援する中で、多重債務の清算ですね。これは事例が多かったです。

現在は事情が少し異なりますけれども、

少なくとも、私たちが出会ってきた中で、彼らの多くは真面目でした。若い頃から一生懸命に仕事してきた人たちが多かったです。腕一本で現場の一番きつい仕事を担ってきて、年をとって、はい、さようなら、っていわれてしまう人たちが圧倒的です。中には厚生年金や国民年金の存在すら知らされていない人たちもいました。

これまで、マスコミ等でおもしろ、おかしく取り上げるホームレス象があります。もうパターン化されて語られてきたように、あいつらは自己責任たてそうになった、自業自得だ、好きでやっているんだ、というような言われ方をしてきました、でも、少なくとも私たちがこれまで出会ったホームレス、好きでやっている人たち少ないです。できるなら仕事を探して自分できちんと生活したいと願っている人が圧倒的です。

私はむしろ、彼らの存在そのものが、私たちの社会の貧しさを表していると思う。どう言う貧しさか、それは、しくみを知らない奴が悪いから、学歴がないから仕方がないからと、知識のない者たち、立場の弱いものたちを利用し、使い捨てにして行く、そういう彼らの犠牲の上に成り立っている、私たちがあるのかもしれない、それは、まさに、私たち自身の貧しさなのではないか、と思います。

悲しきかな、彼等の取り戻しの作業には時間と手間が係ります。社会に復帰して行くためのリハビリが必要です。

想像してみてください。深夜から明け方にかけて、今の時期などまさにそうです、寒くて眠れないですし、下手をすると凍死しますから、体を動かして少しでも暖かくなろうと夜は町を徘徊する。食べ物も探さねばならないですからね。昼は図書館、公共施設で居眠りをする。そういう生活が染み付いていますから、朝起きて夜眠る、という基本的な生活の取り戻しというところからスタートしなければならない。

食べること、今日生きることだけに奔走してきた彼らが、そう簡単には、じっくりこれからの人生を考えることなどできないのです。それはおそらく私だって、そうなってしまった時は同じなのだろうと思うのですね。

さて、次に進めますけれども、活動を始めた当初、2000年の時点で、ですね、私たちの活動拠点の仙台には、先ほど来申してきました、200人を下らない路上生活者がいました。当時の、仙台市内のホームレスは、ほぼ全てと言っていいくらい、東北の出身、都会に出て働き詰めで、結局どうしようもなくなって、東北に帰ってきてホームレスになるという方々でした。戦後から1970年年代にかけての高度経済成長期、金の卵と呼ばれて、東北各県から就職列車で東京や大阪などに出て行って、ずーっと働いて、人によっては年金も保険もかけてもらってなくて、年をとって働き口がなくなる。気がつくと手元に何も残っておらず途方に暮れる。どうするのか、多くの人たちは、生まれ故郷の少しでも近くに来たいと考えて、東北に戻ってくる。

東京の上野駅や大宮駅から生まれ故郷の東北を思うということ良く聞きますが、それと同じように、路上生活ができる北限と言われている仙台の地から、仙台駅から、東北各地の自分の故郷を思うので

す。それが 2000 年代初頭の東北宮城、仙台のホームレスの実情でした。

あるホームレスの方の言葉が今でも胸に焼き付いているのですが、彼は、こんなこと言っていました。その人は岩手県の郡部の出身で、若い頃から 40 年以上ずっと東京で鳶職の仕事をしてきた人でしたが、歳をとって仕事がなくなって生活できない、年金も欠けていない、そこで、仙台までやって来て仙台駅周辺で路上生活をしていました。私尋ねたんです。「どうして仙台で路上生活をしているの」という私の問いに、彼は、このように答えました。「故郷の岩手に帰りたい。でも、こんな体たらくのままいまさら故郷に帰れない、生まれ故郷に少しでも近い仙台で自分は死にたい」。心打たれましてねえ。可哀想だ、可哀想を作り出している根源的原因は何か、深く考えさせられる言葉でもあったんです。

ただいま申し上げたように、私たちが活動を始めた約 25 年前、2000 年代初頭くらいまでは、東北から都会に働きに出て働いて働いて、年を重ねて、「もう年齢的に仕事は無理だ」と言われ解雇される。はたと気づくと、手元に何も残っておらず、社会保険や厚生年金もかけてもらっていないので年金も失業保険も貰えない。仕方がなく東北に戻って来るのだけれども、今さら生まれ故郷に戻れない、どんな顔をして実家の戻れるのか。そこで、仙台に行けば同じ東北だし、故郷に近いし、なんとかなるのではないかということで、仙台にやって来る。そのような、東北出身の 50 才代後半から 60 代前半の男性の割合が、仙台の路上生活者は高かったように思います。95%が男性でした。

ところが、2008 年にリーマンショックがおきまして、仙台でも、会社が立ち行かなくなって突然解雇される働き盛りの世代の生活困窮者が増加しました。

私たちが支援した方の中で、大型トラックの運転手を長年してきた 40 歳代の男性がいらっしゃいました。月収 70 万円を下らない、本当に頑張って働いて来たのに、突然運送会社が立ち行かなくなって、マンションのローンが払えなくなって、結果家庭が崩壊し、全てを失って路上生活、強いられてしまったということでした。これまで真面目に働いて家族を養っていたのに、どうしてこんなことになってしまったのか、どうしてよいのかわからないとご本人が頭を抱えていたのを覚えています。

そして、2011 年 3 月の東日本大震です。震災直後、護岸工事や半壊したり全壊したりした家屋の解体、福島原発事故後の除染など、復興関連の仕事を求めて全国各地から、働き盛りの人たちが東北に集中しました。

しかし、復興関連の仕事が一段落して、仕事と寮の部屋を失って、仙台で路上生活を余儀なくされたという方々が爆発的に増えました。ホームレスの平均年齢も、東日本大震災前の 56 才から、東日本大震災後 47 才と、10 才近く若くなりました。この東日本大震災をきっかけにして、私たちの支援の対象も、ホームレスにとどまらず、生活困窮者全般が対象となっていきました。

そして、2020 年からのコロナ禍です。2020 年ごろから、新型コロナウイルス感染症が大流行して、特に、2020 年春から、働き盛りの若者たちから相談が殺到しました。2020 年当初は、とにかく飲食関係で働いていた若者たちからの SOS が多かったです。

仙台地元の老舗酒屋の二代目で大学を卒業して実家の家業を都合としていたのだけれど、コロナ禍で飲食店からの酒の注文が途絶えて家業が傾き、資金繰りが尽きて店じまいをすることになって借金を背負い路上生活を余儀なくした 30 才代の若者がいました。「や

っと跡継ぎができて安泰だ」と喜んでいた父親も途方に暮れていたということでした。

あるいは、東京赤坂で、高級割烹料理店の板長だった人が、仕事が全くなって部下のために自ら職を辞し伝手を頼って仙台に来たもののどうしようも無くなったという方もいらっしゃいました。

コロナ禍の影響で生活困窮に陥る多くが、働き盛り、なのに、突然の失業、事業が立ち行かなくなったという仕方で行き詰まるという方々ばかりでした。

そのような意味で、いわゆる「路上」というのは、その時代時代の社会の状況が集約される場所と言いましょか、あらゆる社会の問題の坩堝、言葉を変えるならば、私たちの社会の現状を映し出す鏡である、そう思われています。

そのような時代時代の課題によって困窮してしまう人たちに、寄り添うようにして、私たちの活動も変化して今に至るのですが、

そう考えてみると、ですね、仕事を失う、生活に困窮する、路上に陥る、というのは、単純に、自己責任や自己都合で片付けられないのでありまして、むしろ、社会情勢、その時代の社会を取り巻く状況や、国の政策、特に経済 施策の問題、あるいは、自然災害、疫病等、外的な要因によって生活困窮し、路上生活を余儀なくされてしまう、まさに、貧困が生み出されるという 構造的現実があると思っています。

あるいは、皆さんも自分ごととして考えていただきたいのですが、人は、誰しも、人生の中で経験するであろう生活の難題課題、直面する、例えば、自分の病気、怪我、失業、離婚、家族の病気、親の介護、家のローン、車のローンを払えない、生活ができない、そういうことあるのだと思います。そういう危機に際し、私たちは、なんとか頑張っってそれを乗り越えようとしたり、家族や知人など周囲の支援に

よって問題を乗り切ろうとする、そしてなんとか乗り切ることか
た、その連続が私たちの人生なのかもしれません。

でもそれら問題が、一度に複数訪れる。人生の危機が重なってしま
う、そういう状況に陥ってしまって、生活そのものが立ち行かなくなっ
てしまう。

後ろ盾がなくなって、孤立無縁になって、踏ん張りきれず、どうしようも
なくなり破綻し、住まいさえ失いそうになるということ、可能性として0
ではないのでしょうか。

ですから、ホームレスの問題というのは、一部人の特殊な人たちの特
別な課題でなく、誰しものが、そうなる危険に陥る可能性があるという意味
で、私たち共通の課題なのだろうと思います。

そのような時に、往々にして「自助」、「共助」だけが強調されること
がよくあります。自己責任なのだから自分でなんとかすべきだ(自助)
とか、家族で、親戚で、仲間でお互いに助け合えばよい(共助)とかで
すね。しかし、自助、共助だけでは解決できないことがありますし、社
会の状況がそのような問題を 引き起こす場合もある。震災、コロナ
禍のようなパンデミック、昨今の物価の高騰な度でもそうです。
そのような意味で、こういう時代だからこそ、「自助」、「共助」のみなら
ず、「公助」が必要になって来ます。

すなわち、国や行政による支援施策であり、あらゆる意味でのセイフ
ティーネットの構築、ネットの網目をきめ細やかにして、いつ誰が、ど
のような危機的状況に陥ったとしても、何度でもやり直しができる社
会の仕組みをさらに豊かにしていくこと大変重要なのだろうと思いま
す。

私いつもホームレスの人たちに呼びかけていることなのですが、それ
は、あなたには憲法 25 条で生存権が保障されている、ということ
です。憲法 25 条。「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活
を営む権利を有する。」

そして、2項「国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。」

全ての人には、健康で文化的な生活を送る権利がある、ということ、そして、国は、それを保障する義務があるということ。そのことをこれから大切にしながら、活動を進めて参りたいと願っております。

さて、時間も迫ってきました。最後に何点か、これまでの支援活動の中で、私自身が気付かされ、教えられてきたことをご紹介します。だきたいと思います。

第一に、「自立」と「自律」の違いについてです。

昨今、社会福祉の領域で、近年、内外の障害者運動の影響を受け、自立という観念が大きく転換してきているのですけれども、

「新しい自立」、律するという意味での自律。

様々な援助を受けながら、自分で自分の生き方を決めていくこと、言い換えれば、地域の中で自分の幸せを求めて生きていくことの大切さを意味するものです。

路上生活から脱して、地域の中でいろんな人々と関わりながら、働ける人は仕事をする、でもさまざまな要因で働けない人は、周りの援助公的不支援や地域の支援に支えられながら、自分の幸せを見つけていく。

すなわち、自立とは、決められた一つの道しかないということではなく、さまざまな選択肢の中から自己実現をできるような歩みを自分自身の手で獲得していく、そのことの大切さを、実際にこれまで何千人ものホームレスと出会って痛感させられたことです。

さらにもう一つ、「ホームレス」と「ハウスレス」は違うということ、深く考えさせられています。これまでホームレスというと、「家がない」「部

屋がない」人たちと括られて来ました。そのような方々への支援として、まず居所を確保して、そこからその先をゆっくりと考えていくこと、すなわち「ハウジングファースト」の重要性を感じるのですが、その一方で、「部屋がある」人たちが置かれている課題というのも痛感しております、先ほど「ホームレス」と「ハウスレス」は違うと申し上げましたけれども、「ホームレス」はハードとしての部屋や家がないということにとどまりません。ハードとしての部屋や家がないのは「ハウスレス」です。すなわち、たとえハードとしての家や部屋があったとしても、さまざまな局面で関係性や自分の根拠を失って孤立してしまう、それが実は、「ホームレス」という言葉が持つ本来の意味、課題なのだろうと思うのです。

逆に言えば、たとえ家やお部屋があって、家族と一緒に暮らしていたとしても、相互の関係性を失い、お互いに関心を持たず、一つ屋根の下に暮らしていても関係性を失ってそれぞれが孤立している、とするならば、それは関係性の喪失としての「ホームレス」と言わざるを得ない。そうだとすればですね、「ホームレス」という言葉は、さまざまに問いかけを持って、私自身のあり方、私たちの関係性そのものを問い直しているのだろうと思います。

現在、私たちが生きているこの社会、物価高等さまざまな要因で、皆が生活に汲々としています。他人のことどころではない、自分のことで精一杯という思いに支配され、その結果、相互の関係性を失い、他人に興味を示さず、一人一人が分断され、孤立していくという傾向にあります。

生活苦や心身の疲れ、将来の不安で、心がキリキリしていく、まるで自分以外の皆が敵であるかのように思い込んでしまう、そのような悪循環があるのかもしれないです。

でもですね、そのような時代だからこそですね、人が本当に人として、自分を謳歌して生きることができるように、私が私として生きるように、そして、私だけではなく、あの人もこの人も、私とおんなじ命を持った一人一人が、かけがえのない人間であることを取り戻していけるような関係、世界を作っていくこと、それは、言葉変えるなら、私自身が人であることを取り戻し、他者を大切な人として確認していくことが求められている、お互いの共感力と言って良いのか、想像力と言って良いのか、共鳴をしていく、心の持ちよう、かもしれない、と思わされています。

そのことを、支援活動の中、当事者たちから、教えられ、思い知らされた出来事、エピソードがありまして、最後にど紹介して終わりたいと思うのですが、

昨年 2024 年の 1 月 1 日に、能登半島地震が起きて、多くの方々が被災されました。

先日 8 日にも北海道三陸沖で大きな地震があり、今なお不便な生活を強いられている方々が大勢おられます。

私は、2011 年に発生したあの東日本大震災、被災をしたのですが、被災者の一人として、また、仙台夜まわりグループの一員として、2011 年の 3 月 11 日の直後、途方に暮れながら涙しながら、被災者支援の炊き出しを行ったことを昨日のように思い起こすのですが、そんな中、昨年 2024 年の 2 月 3 日、能登半島地震直後ですが、ホームレス支援活動のセミナーの際に、参加してくれた仙台市内のホームレスを対象としたアンケート調査をしました。そのアンケートの設問の一つに、「能登半島の被災者に何を思いますか？ ご自由にお書きください」というのを載せて記入してもらったんです。仙台市内のホームレスたちがいろんな答えを書いてくれました。

たとえば、「心からお見舞い申し上げます」。「一日も早い復興を願っています」。「光は必ずある」。「頑張れ石川、がんばれ能登」そのように、それぞれ熱い思いと心のこもったメッセージを自身の言葉で書いてくれました。

その中で、一人、非常に印象深い回答をしてくれた方がいました。こういうことを書いてくれたホームレスがいたんです。ちょっと読み上げますね。

「2011年の東日本大震災で、自分も被災した。家も仕事も、家族も失った。その時は、途方に暮れて、苦しくて苦しくてたまらなかった。そんな時、しきりに、頑張れ、頑張れ、頑張ろうという言葉が目についた。頑張ろう宮城、頑張ろう東北」

でも、その人はこのように書いているんです。

「その連呼は辛かった。もうこれ以上何を頑張ったら良いのかわからなかった、失ったものの大きさを押しつぶされそうで、頑張れって言われたって頑張れない、自分にとっては辛くて重荷で、悲しかった。あの時自分はそうだった。だから、今、自分は、能登の人たちに、頑張れ、という言葉をかけられない。でも、もし、能登の人たちに自分が言葉をかけるとしたら、『辛いよな、苦しいよな、悲しくて胸が痛いよな、希望なんかないと叫びたいくらいどうしていいか全然わかんないよな、でも東日本大震災の被災者の俺は、こうして10数年なんとか生きてこれたんだよ、能登の人たちもそうであるといいなあ、そう言葉かけしたい。』」

この方は、自分自身が経験した震災の痛みを、このような共感の言葉として他者にかけていきたいと語っている、

これ大事なことなんだろうと思う。他者の痛みや窮地に、共鳴していく感性といいましょうか、そのレベルは違っていても、そこに思いを馳

せていくことができる心、とても大事なんだなあと思わせられました。

私の命はあなたと繋がっている、私の心はあなたと繋がっている、私もあなたもおんなじかけがえのない命じゃないか、という共感、共鳴、その心を取り戻し培っていくことの大切さ、を痛感させられたのです。

長々とホームレス支援のお話をさせていただきましたが、おそらく今申し上げましたお話は、ホームレスという個別のテーマだけにとどまらず、皆様が関わったり取り組んでいたりする課題と、直接間接的にまたさまざまな仕方で繋がっているのだらうと思います、

困った時はお互い様、あなたもわしもおんなじかけがえのない命なんだよ、あの人もこの人も、あなたも大切に大切にすべき命、かけがえのない存在なんだよ、この真実を私ども、25年間、大切な根本理念として、そう連呼しながら、活動を進めて参りました、

ぜひ皆様も、そのような真実から触発される行為や出会いを大切にしながら、ますます、それぞれのお働きに精進して行っていただきたいと願っております。

皆様これからのご活躍、ご健勝を祈念しつつ、私のお話を閉じさせていただきます。

ご清聴、ありがとうございました。